◆地域活動

ヒトエグサ養殖適地試験

本部駐在　平安名　盛　正

1．目的

恩納村、北中城村等で盛んに取り組まれているヒトエグサ養殖であるが、近年ヒトエグサの需要は県内外でも高く、そのため、今後生産量の増大が期待できる。羽地漁協組合員においては他の漁業との複合が可能であるヒトエグサ養殖の技術を習得し、平成２０年の漁業権の更新において養殖漁場の展開を図る計画である。ヒトエグサの養殖を行うためにはその生育条件にあった漁場の選定調査が必要不可欠であることから、養殖試験を実施し、漁業権更新時に漁場の取得を行いたい。本試験調査は、平成１７年度事業より開始し、平成２０年度８月末を事業終了としている。実質、平成１９年度が最終試験調査実施年度であり、過去２年間の調査結果を受け、名護市饒平名地先において養殖試験を実施し、養殖場としての適性について検討した。

これまで、仲尾地先においても養殖試験を実施してきたが、来年度から北部土木事務所による、仲尾地先道路拡張工事に伴う埋立計画により、同地区での漁業権取得申請は行っていない。このため、今年度は屋我地島饒平名地先のみでの養殖試験となった。（図１）

2．材料及び方法

１）採苗試験

平成１９年１０月３日～１１月１５日にかけ、羽地内海の北側に位置する名護市屋我地南側の饒平名地先において、採苗の可否について調査を行った。図１に示す範囲内に底面から 20cm の高さに５枚重ねで網を張った。（図２）

２）本張り養殖試験

名護市饒平名地先において平成１９年１２月１６日に、本張り養殖試験により養殖場としての適性について検討した。

3．経過及び結果

１）採苗試験

平成１９年１２月１６日に饒平名地先に張った網に種が付いているが、赤土の影響が強く、また網の汚れを取り除くなどの管理が徹底されていないため、まばらな付き方である。多くの網は泥と種が団子状態でへばりつき、黒く溶けた状態となっている。指で擦ると海中に溶けて落ちてしまう状況である。しかし、管理を徹底することによりかなりの種付き、成長が期待できる。

２）本張り養殖試験と収穫結果

これまでは、羽地漁協組合員の中では熱心にヒトエグサを養殖しながら複合的に漁業収入の増加に努めることへ期待があったようであるが、饒平名地区の土砂の流入等による根本的な環境の悪化は漁業者のやる気をもなくしてしまうように思える。それでも、やる気のあるメンバー２名、漁協職員１名、普及指導員１名で、平成２０年２月１２日に饒平名地先において２回目の収

穫を行った。１週間前に第１回の収穫を実施したが、ヒトエグサの伸びが悪く、１枚しか収穫できなかった。このため、１週間ほど収穫時期を延ばした。収穫は干潮時に合わせて網が干上がり始めた時間帯を見計らって、手摘みで行った。（図３～図７）再度同じ網から収穫するため、根を残した状態で収穫し、網はそのまま張った状態で張り直した。収穫したヒトエグサはその場で海水による手洗いと水切りをして持ち帰り重量を測定した。この日収穫した網は３枚で、湿重量 59kg、網１枚につき約 20kg の収穫であった。（図８、図９）

その後は、４月１１日までの間、適時収穫を行い、最終的に網 25 枚で約１ｔの収穫量（１枚につき約 40kg）となった。

前年度の経験から、収穫機を使うよりも手摘みがよいとのことから、すべての摘み取りを手摘みとした。また、今後の課題としては、ヒトエグサ養殖漁場として広大な干潟がありながら、土砂の流入等により、ヒトエグサへの土砂の付着から摘み取り後の洗浄等へかなりの労力を要する現状がある。平成２０年度名護市の補助を受けて、洗浄施設建設計画があり、漁協としても全面的にバックアップする体制を整えつつある。

４．所　見

今後は、先進漁協の視察等を実施し、加工技術の導入も考えていく必要がある。養殖適地試験自体は、屋我地島饒平名地域においては成功したものと思える。このため、漁業権取得後、今後は、ヒトエグサ養殖漁場範囲の区分け、収穫方法、将来的な加工及び販売方法についても検討していく必要がある。

図１．ヒトエグサ養殖試験漁場図

図２．種付け網設置直後

図２．種付け網設置直後

図３．饒平名地区における種付きの状況

図４．饒平名地区における種付きの状況

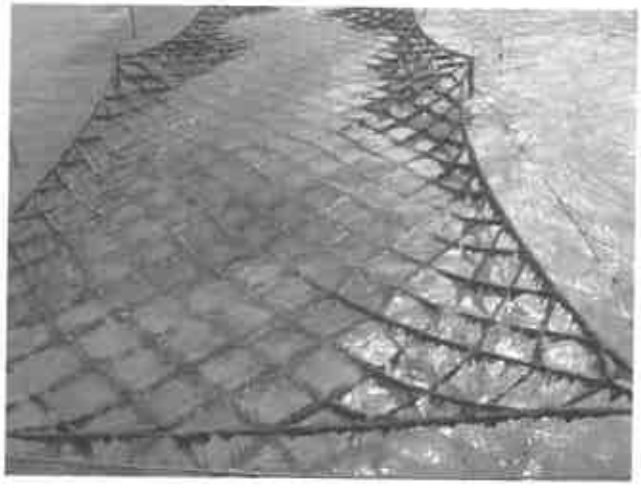

図５．収穫前の繁茂した網

図６．収穫し易いように工夫

図７．収穫作業

図８．網３枚からの収穫